

## 終戦の年の薬学雑誌 ガリ版刷りの薬学雑誌

東京が焼け野原になった終戦の年(1945年)にも薬学雑誌(65巻)は発行されていた。通常は年12冊発行であるが、この年は、全部で7冊しか発行されていない。このうち3冊は合併号(5, 6号, 7, 8号, 9, 10号)である。いずれの号も15~20頁前後で、掲載論文数は9報前後であるが、論文数に比べて頁数が少ない。これは、前年(1944年7月号)から、紙の節約のため抄録のみの掲載版(甲号)が配本されているからである。また2号, 3号, 4号はガリ版刷り(写真)で、版も一回り小さくなっている。これは東京の空襲の際、印刷所が被災したものと思われる。さらに事務所移転の際、配布先の住所録が不明になった(おそらく焼失した)ため再登録をするように会告に記載されていたり、論文の焼失のため編集委員が新たに抄録を作成したり、発刊月と受理月日が前後している論文があったりと、発行が非常に困難であったことがうかがわれる。

しかし、5, 6月号からは既に通常の活版印刷に戻っている。会告によると、9月15日には既に月例会が開かれており、研究発表もされていた。激しい空襲の中で、生命の危険も顧みず、設備、試薬すべてが不足しているなか研究を続け

ていた人たち、そして論文誌を発刊し続けていた当時の薬学会の役員の方達の覚悟と情熱に強く心を打たれる。酸化して黄ばみ、文字さえはつきりと読めない薬学雑誌65巻は、終戦当時の混乱と絶望の中でも研究を続けてきた先輩達の強い気持ちが生々しくと伝わってくる。

薬学部6年制が施行され研究体制の危機が叫ばれるなかで、先行きの不安から研究に対する情熱を失ってしまいそうになるが、この薬学雑誌を手にとると、どのような状況下でも研究を続けて行こうという勇気を私に与えてくれる。

横山祐作

